

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：34305

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730716

研究課題名(和文) 多元的宗教教育の意義と限界に関する国際比較研究

研究課題名(英文) International Comparative Study on the Significance and Problems of Pluralistic Religious Education

研究代表者

宮崎 元裕 (MIYAZAKI, Motohiro)

京都女子大学・発達教育学部・准教授

研究者番号：20422917

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：近年、多文化共生の観点から必要性が高まっている多元的宗教教育について、トルコとイギリスを事例に比較検討を行った。まず教科書の分析をもとに、両国ともに他宗教に対する寛容性を育むための宗教教育がどのような内容で行われているかを確認した。さらに、両国の宗教教育の内容の共通点と相違点、およびその背景や近年の教育改革の動向について分析しながら、多元的宗教教育の意義と限界について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The study analyzed pluralistic religious education in Turkey and UK. In the multicultural era, the importance of learning about other religions and developing an open-minded attitude to them is increasing. I confirm that these perspectives of religious education are emphasized in Turkey and UK, through analysis of textbooks about religions. I also indicate that the contents of pluralistic religious education in Turkey and UK have differences and similarities, and each historical and social background makes their own religious education. Through analyzing recent educational reforms, I show the significance and problems of pluralistic religious education.

研究分野：比較教育学

キーワード：トルコの宗教教育 イギリスの宗教教育 多元的宗教教育 多文化教育

1. 研究開始当初の背景

世界的に見て、20 世紀後半以降の社会の多文化化の進行に伴い、異文化間の相互理解の重要性が増すようになり、これに対応する形で、多文化教育・異文化間教育・国際理解教育といった教育が重視されるようになってきている。こういった教育には、文化の違いに端を発する問題を減らし、異なる文化者集団が共生していく基盤を築くことが求められている。さらに、諸外国では公立学校における宗教教育の内容も 1980 年代頃から大きく変化し、宗教間の相互理解を深めることを重視する宗教教育が行われるようになってきている。1980 年代以前の宗教教育は児童・生徒の自らの宗教に対する信仰を深める形でなされていた(自宗教のみを学ぶ宗教教育)のに対し、1980 年代以降は他宗教についても学ぶ宗教教育が重視されるようになったのである。こうした変化をもたらした主たる理由は、社会の多文化化の進行に伴い、自宗教について学ぶだけでなく他宗教についても学ぶことが多文化共生の観点から必要とされてきたことである。こうした諸外国における多元的宗教教育を重視する動きは、異文化間の相互理解が不可避となっている多文化時代において、非常に大きな意義を有したものである。

その一方で、日本では、政教分離原則により公立学校における宗教教育は禁じられてきたことを背景に、宗教教育を巡る研究は宗教的情操教育の是非を問うものに偏っており、諸外国における宗教教育に注目した研究は非常に少ない。また、新しいタイプの宗教教育(他宗教に対する寛容性を育むことを目的とする多元的宗教教育)についての研究も十分ではない。

2. 研究の目的

社会の多文化化の進行に伴う異文化理解の必要性の高まりから、多くの諸外国において、公立学校における宗教教育が変化し、他宗教に対する寛容性を育むことを目的とする多元的宗教教育が重視されるようになってきている。一方、日本ではこうした諸外国の多元的宗教教育に注目した研究は少ない。国際化の進展に伴い日本においても他宗教理解の重要性が高まっている状況を踏まえ、トルコとイギリスを事例に、多元的宗教教育の意義と限界について具体的に検討することが本研究の目的である。

主たる研究対象国として、トルコを取り上げる理由は、政教分離原則を国家原則としている点、及び、宗教的同質性が高い(イスラーム教徒が国民の 99%と圧倒的多数を占める)という点で、日本と共通点があり、日本との比較可能性が高いからである。イギリスを取り上げるのは、トルコは国内的にはイスラーム教徒が圧倒的に多く、トルコだけでは分析に偏りが出る可能性が高いためである。そこで、多数派宗教がイスラーム以外で、ト

ルコに比べて国内に多様な宗教を信仰する国民を抱え、なおかつ公立学校における多元的宗教教育を重視している国家も研究対象国に入れる必要があると考え、イギリスを対象国として選定した。

3. 研究の方法

トルコとイギリスの宗教教育の教科書を基本資料とし、その分析を進めた。また、両国の宗教教育に関する資料をもとに、両国の宗教教育について、歴史的・政治的・社会的背景についても検討した。

さらに、資料のみではわからない状況(特にトルコの 2012 年義務教育改革に伴う最新情報や、宗教教育が現地でどのように受け止められているのか)については、現地の学校の見学や、教育関係者、宗教学者へのインタビュー調査を行った。

その上で、多元的宗教教育の意義と限界について分析を行った。

4. 研究成果

(1) トルコの多元的宗教教育の内容

トルコの公立学校で、小学校の第 4 学年以降、必修科目とされている「宗教文化と道徳」の授業の教科書には、下記 3 点の特徴がある。

宗教・宗派の違いを肯定的に評価する。

信教の自由を尊重する。

他宗教との共通点と寛容性を学ぶ。

違いを否定的に捉えるのではなく、違いがあることは豊かなこととして、宗派・宗教の違いを肯定的に評価しながら、信教の自由を尊重することの大切さや他宗教に対する寛容を強調していることがトルコの特徴である。その際、イスラームが本質的に信教の自由を認める宗教であり、歴史的にも多宗教の共存を成し遂げてきた宗教であることも強調されている。

(2) イギリスの多元的宗教教育の内容

多文化主義的な側面を重視して作成されたイギリスの宗教教科書には、下記 3 点の特徴がある。

他宗教を学ぶ。

他宗教の信徒に親しみを抱かせる。

宗教の伝統や決まりを論理的に考える。

この中では、特に 3 点目の持つ意義は大きい。他宗教の伝統や行事、決まり事を知識として学ぶだけでなく、「なぜそのようなことをするのか。なぜそのような決まりがあるのか」という理由を論理的に考えることは、異なる文化背景を持つ者同士が相互理解を進める上で非常に重要なことである。なぜなら、伝統や決まりを固定的に捉えているだけでは、結局のところ、お互いの伝統や決まりを一方向的に主張する以上のことはできないからである。双方が「私たちの伝統はこうだから認めてください」と主張しあうだけでは平行線で何も状況は改善しない。「私たちがこういうことを大切にしているのは、こういう

理由からです。この理由には一理ありませんか」とお互いに論理的に話しあうことによってしか、異なる文化背景を持っている者同士の対話は始まらない。このイギリスの教科書からは、異文化理解を進めるためには自らの伝統や決まりを論理的に説明できるだけの論理的思考力が重要であることを再確認することができた。

(3) トルコとイギリスの比較

トルコとイギリスの多元的宗教教育を比較すると、下記4点の共通点・相違点がある。

自宗教だけでなく他宗教についても学ぶことは共通している。ただし、他宗教を取り上げる分量は、イギリスに比べてトルコは少ない。トルコでは、あくまでもイスラームに関する内容が大部分を占める。

イギリスでは他宗教の信徒に親しみを抱かせることを明確に意図した内容がかなりの分量あるのに対して、トルコではイギリスほど他宗教の信徒に親しみを抱かせることを明確に意図した内容はない。

イギリスで重視されている「宗教の伝統や決まりを論理的に考える」内容が、トルコでもまったくないわけではない。しかし、トルコの場合、「考えてみよう」という課題は、あくまでもクルアーンや教科書の内容を理解するために提示されており、宗教間の相互理解を進めるために役立つ課題とは認識されていない印象を受ける。また、イスラームに関する内容が主となっているため、イギリスのように他宗教の伝統や決まりを論理的に考えることで、他宗教に対する理解を深める視点は欠けている。それゆえ、イギリスと比べると、「宗教の伝統や決まりを論理的に考える」ことで相互理解を促すという多元的宗教教育の機能は、トルコではきわめて弱いと言わざるをえない。

トルコの特徴として挙げられるのは、イスラームが本質的に宗教の違いを尊重する宗教であること、また、歴史的に見ても他宗教と共存してきた実績のある宗教であることを根拠としながら、(宗派・宗教の)違いを尊重することの重要性を強調している点である。

(4) トルコとイギリスの多元的宗教教育の背景の違い

トルコとイギリスの多元的宗教教育の違いが生じた背景と考えられるのは次の点である。

まず、国内的に見て、他宗教を学ぶ必要性が高いか低いかという違いがある。移民の増加に伴い、国内に多数の宗教的マイノリティを抱えることになったイギリスでは、宗教間の相互理解・共存を進めるためにも、他宗教を知り、理解する必要性に迫られている。それに対してトルコは、国民の圧倒的多数がイスラーム教徒であり、国内的には他宗教を学ぶ必要性は、イギリスに比べると相対的に低

い。こうした違いが、多元的宗教教育に影響を与えているのは確かである。

また、トルコの場合、オスマン帝国時代に諸宗教が平和的に共存していたという歴史があることもあって、イスラームが本質的にも実質的にも他宗教に対して寛容な宗教であるという自負があり、イスラームを学ぶことで多宗教が共存するために必要な寛容性を学べると考えられている。このこともトルコの多元的宗教教育に影響を与えていると思われる。実際、2013年にトルコ訪問調査を行った際も、「多文化時代においては、これまで以上に他宗教について学ぶ必要を感じないか」という問いに対して、「イスラームは多様性を認める宗教だから、イスラームをきちんと学ぶことが重要だ」というニュアンスの回答を何度か聞いた。こういった意識が多元的宗教教育のあり方に影響を与えていることは確かのようなのである。

(5) 多元的宗教教育の意義と限界

トルコではイスラーム(=自宗教)を中心に学びながら、イスラームが(宗派・宗教の)違いを尊重してきた宗教であることを強調することで、他宗教に対する寛容性を育もうとしている。それに対して、イギリスでは、他宗教を学び、他宗教に対する親しみを抱かせ、宗教の伝統や決まりを論理的に考えることで、他宗教に対する理解を進めようとしている。こうしたアプローチの違いはあるものの、トルコの宗教教育もイギリスの宗教教育も、宗教間の共存が求められる多文化時代にふさわしい多元的宗教教育として意義あるものと評価できる。

しかし、イギリスにおいては、多文化主義的な側面ばかりが強調された宗教教育の問題点も指摘されるようになってきている。また、トルコの宗教教育については今後のゆくえを慎重に見守る必要がある。というのは、トルコの宗教教育が多元的宗教教育の要素を含むに至ったのは、トルコ共和国成立後の世俗主義を巡る紆余曲折の経緯が大きく影響しているからである。国家原則である世俗主義と矛盾しない宗教教育のあり方が模索された結果、「宗教文化と道徳」の授業は、宗教・宗派の違いを肯定的に評価する多元的宗教教育の要素を多く含んだ内容になっている。

しかし、こうした宗教教育は、トルコ国内で必ずしも国民のコンセンサスを得たものではなかった。自宗教の信仰を深めるための伝統的な宗教教育を求める国民は多く、特にアラビア語とクルアーンの学習に対するニーズは高い。そのニーズが満たされない状況が長らく続いたものの、2012年の義務教育改革に伴い、イマーム・ハティブ中学校が再開され、公立学校で宗教関連選択科目(「クルアーン」「ムハンマドの生涯」「宗教の基礎知識」)が新設された。

この改革は、従来の「宗教文化と道徳」の

授業だけではイスラームの教育として物足りないと感じていた国民にとっては、待望の改革である。特に、国民のニーズが高かった、クルアーンとアラビア語の教育の選択肢が設けられたことの意味は大きい。共和国成立以来、世俗主義との関係で、公教育においてイスラーム教徒がイスラームのことを学ぶことに制限がかけられていたことは確かであり、その意味ではようやくイスラーム教徒が自らの宗教を十分に学ぶ教育を公立学校で受けられる道が開かれたと言える。

しかし、こうした改革に伴い、「宗教文化と道徳」の授業が、イスラームを学ぶ者にとっては中途半端なものとして軽視されてしまうような状況が生じる可能性も否定できない。もしそうなってしまった場合は、トルコの宗教教育において、多元的宗教教育の要素が弱まることになる。もちろん、これまで行われてきたトルコの多元的宗教教育が多く国民に評価されていたのであれば、そういった状況にはならないはずである。その意味では、今後、トルコの宗教教育を巡る状況がどうなっていくのかは、これまでの多元的宗教教育がトルコに根付いていたのかどうか（多元的宗教教育の成果があったのかどうか、あるいは多元的宗教教育が評価されていたのかどうか）を検討する上で、慎重に見守らなければならない。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計3件)

宮崎元裕「トルコにおける多元的宗教教育の状況とその可能性 イギリスとの比較を通して」『京都女子大学発達教育学部紀要』査読無、11号、2015、pp.31-40

宮崎元裕「トルコにおける 2012 年義務教育改革 宗教関連選択科目の新設とイマーム・ハティブ中学校の再開に注目して」『京都女子大学発達教育学部紀要』査読無、10号、2014、pp.21-30
<http://hdl.handle.net/11173/1511>

宮崎元裕「多文化時代における価値教育の変容 論理的思考の重要性に注目して」『京都女子大学発達教育学部紀要』査読無、9号、2013、pp.37-44
<http://hdl.handle.net/11173/108>

〔学会発表〕(計1件)

宮崎元裕「トルコにおける 2012 年義務教育改革と宗教教育」日本比較教育学会、名古屋大学東山キャンパス、愛知県名古屋市、2014年7月12日

6. 研究組織

(1)研究代表者

宮崎 元裕 (MIYAZAKI, Motohiro)
京都女子大学・発達教育学部・准教授
研究者番号： 20422917